

佐多稲子『夢の彼方』論

——国策に絶たれた〈夢〉のゆくえ——

1 はじめに

佐多稲子の『夢の彼方』は昭和一五年五月に『改造』に発表された。この年の佐多は、三月に書下ろしで刊行した『素足の娘』¹⁾がベストセラーとなって流行作家としての位置づけが与えられ、その一方私生活では夫との信頼関係が崩壊し、戦時体制への抵抗意識も薄れ始めてきた頃とみられている。すでに思想活動の拠点も崩壊し、書くべきテーマの中心は〈女〉に向けられていた。この年の前後、佐多は『素足の娘』以外にも、短編ながらいくつもの佳作を発表しており、それらはいずれも、大きく変わりゆく時代を前にした庶民の姿を細やかに描き上げている。渡邊澄子は「全集第三巻の世界」⁴⁾で昭和一四年から終戦までの佐多について「時代の強圧のもとで、じりじりと後退していった姿と、この時期の作品にモチーフの不確かな、特に一編の結末部分が要領を得ぬままに終わっている作品の多いことは無関係ではないように思う。反戦を作品に盛り込む苦心の現れともいえるが、婉曲な表現の多用がモチーフを結局は晦ましてしまっているのである」と指摘しているが、『夢の彼方』にもこの指摘は当てはまる。中心人物の突然の発狂、そこから一転工場

小 林 美 恵 子

街の託児所に場面が移り、その子供たちの病の話で幕を閉じる展開にはいささか戸惑わされる。が、そこには遺伝性の性病の存在が横たわり、それはひいては花柳病対策の不備の問題でもあり、佐多が何らかの国策批判の意図を込めている気配は十分に察せられよう。工場の「小僧」をしていた雄吉は切ないまでの上昇志向ゆえに「鉄道学校」に進み、日々の努力を重ねて前進を試みたが、ある日先天性の脳髄毒を発症し、「廢人」となってしまう。彼を蝕んだものは、脳の病ばかりではあるまい。雄吉の中の高いプライドと卑屈な劣等感を緻密に描きながら、遺伝性の性病という運命づけられたもので雄吉の将来があっけなく絶たれる展開はどう受け止めたらよいのであろうか。

作品内には雄吉が学ぶ「鉄道学校」内の雰囲気描写されている。昭和一五年当時には、技術訓練学校やその訓練工場、ましてや交通路設営の技術者を養成する機関には、すでに軍需工場という意味合いが濃厚だったはずだ。が、作品内時間は、アメリカ映画「モロッコ」⁵⁾の名があるところから、昭和六年前後に限定される。したがって、戦時下を直接感じさせる表現もほとんど見当たらない。佐多が昭和一九年に陸軍兵器学校に学ぶ若者たちの迷いのない報国意識を

描いた『生きた兵器』と比較すると、『夢の彼方』には、作品内時間が日中開戦前に設定してあるためか、作業に身の入らない者、技工としての将来を悲観する者、別の進路を夢見る者などの存在が憚りなく描かれる。佐多には、この時間設定を隠れ蓑にして、書き表したものであるのではないだろうか。

本稿では、雄吉が「鉄道学校」に入った意図やその後の格闘の姿、それが遺伝性の性病であつてなく幕を閉じるという悲劇に込められた意味について検討してみたい。また、そこに描かれているのは昭和六年当時の閉塞感ということになるが、九年前を振り返るかたちでそれを読んだ発表当時の読者には、さらに他の何事かをも感じさせた可能性がある。昭和一五年当時の人々の意識や九年間の社会の変動を手がかりに、その「何事か」の所在を探ってみたい。

2 雄吉の上昇志向

八島雄吉は大工・久蔵の子である。雄吉と妹の二人を残して早くに実母が亡くなった後、後妻となったお好に育てられ、その後雄吉には次々と弟妹が増え続けている。久蔵は無口な好人物として描かれ、長男である雄吉への接し方も寛容である。家庭は貧しいながらも穏やかに治まっているが、雄吉はこの家に染みついた「貧乏暮らし」の臭い、文化的な気配のなさに違和感や不満、あるいは諦めのもつた悲しみを抱きながら成長していく。

雄吉は、高等小学校を卒業後、父親の出入りしているあるメリヤス工場へ「小僧」として就職した。そこで働く「年増女工」たちにとって、「可愛い」雄吉は格好のからかいの的とされた。雄吉にはそれを職場になじめた喜びとすることはできず、「女工たちの遠慮

のなさやみだらな態度にも自尊心を傷つけられ」るような毎日を送っていた。

小学校の時から勉強のできた雄吉には、彼なりに抱く将来への希望があった。「利発で、憎げのない顔」「大工の子に似ない品の良い顔立ち」と表現される雄吉の容貌も、周囲の彼に対する扱いを一段高いものにしたに違いなく、それがまた雄吉の将来への希望を膨らませる種になったであろう。小学校卒業後、中学校へ進学しなかったのは家庭の経済的事情と思われるが、高等小学校へ進学したのは、そんな中でも勉強を続けたという雄吉の希望が通ったものかと思われる。メリヤス工場に就職したのも、「小僧にやられた」とあるところから、彼の積極的な意志ではなかったに違いない。

意に染まぬ形で社会に出た一五歳の雄吉が、その後、成長に従って自身の望む生き方を模索するのは当然のことであった。「彼の胸に抱く希望が、この生活への飽き足りぬ思いに急き立」て、「中学講義録などとして、秘かに勉強もしていた」という。「努力をして偉くなる」、すなわち、貧しい家庭の雄吉は、小学校で他の子どもより優れていることが証明された自身の学力を頼りに、学歴をつけて立身出世を果たしたかったということであろう。「小僧」をし、ゆとりのない家庭に身を置く雄吉が足を踏み入れられる「学校」は、技術系の訓練校に限られたものと思われる。雄吉が目留めたのは「鉄道学校」であった。そこは鉄道関係の中堅技工を養成する、官営某工場の見習所であった。見習生は一二〇人余り、一・二年生の二学年に分かれ、やすり掛けでの仕上げ・組み立てを習得中の雄吉たちのほか、鍛冶・塗工・客車づくり等に分かれて指導を受けている。

近代の幕開けと同時に、明治政府は、列強に伍するために国策として鉄道建設に取り組み、国力増進を目指した。国内の鉄道網は次々と整備が進み、日清・日露戦争では軍事物資輸送に欠かれない物流の要とされ、明治三九年には、日露戦争の際にロシア帝国から譲渡された長春・大連間と、日本が建設した安東・奉天間を經營する南滿州鉄道会社を設立、翌四〇年には私鉄を順次国有化し、戦時への備えを強化していった。昭和初期に一時自動車にシェアを奪われかけるが、満州事変（昭和六年）・支那事変（昭和二年）と続く戦時体制の強化が鉄道産業を興隆させ、以後、船舶不足とガソリンの消費規制により、海運や自動車を大きく上回り、鉄道は輸送事業の柱となっていた。⁷⁾

『夢の彼方』の作品内時間に関わるところでは、昭和七年の「満州国」建国により、日本から朝鮮半島、そして中国大陸へと向かう軍事・生活物資輸送の需要が拡大していることに注目したい。日中開戦前とはいえ、すでに鉄道整備による戦闘態勢への構えは作られ始めていた。日本政府は首都・東京と大陸との間に人や物資を迅速・確実に大量輸送できる「弾丸列車」の計画を立てていた。

東京を出発して直線距離で下関へ、そこから関門トンネルをくぐって小倉・博多を経由、佐賀の呼子から再び海底トンネルをくぐり、壱岐・対馬を経て朝鮮半島へ上陸、釜山から京城へと半島を北上し、「満州国」の奉天を経由して北京が終点、ここまで約24時間での到達、という壮大な計画である。作品の発表時間である昭和一五年には一月に帝国議会で予算案も通過した。『夢の彼方』の作品内時間から発表時までの間、鉄道が国民の大きな関心事であったことは疑いない。

昭和一五年はまた紀元二六〇〇年の年にあたり「弾丸列車」計画以外にも、東京オリンピック開催・テレビジョン実用化・日本万国博覧会開催が、すべてこの年に実現される予定だった。⁸⁾日中戦争で鉄が不足したことを理由にオリンピックと万博計画が七月に返上され、それを放送するはずだったテレビ放送は翌年太平洋戦争開戦と同時に研究中止に、弾丸列車も昭和一八年の一月にやはり資材・人材不足で工事中止に追い込まれた。が、『夢の彼方』発表の五月には、これらの計画が実現間近のものとしてとらえられていたわけ、一九四〇年の時点で、日本が一九四五年八月に壊滅的敗北を喫すると想像した日本人はまずいかなかっただろう⁹⁾という指摘は、現実感を伴って受け止められる。

雄吉が鉄道学校に足を踏み入れた昭和六年当時、すでに鉄道は戦時体制を意識した国策事業の中心に位置づけられていたわけで、一人でも多く優秀な技師を育てることは急務であったはずだ。「鉄道学校」が募集したのは、将来の中堅技工候補であり、現場での活躍を大いに期待される有望な少年たちであったことは間違いない。

それでも、雄吉が「鉄道学校」に今一つ夢中になれなかったのは、彼がこの進学にかけた期待が、職業の確保や経済的安定だけではなかったからである。

少年の欲望は、少年の日の雰囲気に対する愛着でもあった。まだ学校へゆきたい。少年同士で勉強したり、遊んだり、喧嘩したり、そんな雰囲気はもう自分には得られないのか、と思うとじつと唇はきつく結んでいるのに、意気地なく涙がにじんでくるのであった。そういうのぞみに、今の、学校と名のついてい

る見習所は唯一の可能を雄吉に見つけ出させた。試験があつて、なかなか優秀なものでなければ入所できない、ということも少年の勇気をかき立てた。

(第二章)

雄吉は、学校という揺り籠の中で、もう少しゆっくりと自身を熟成させ、学問を身につけ、満足いく期間を経てから社会へと踏み出したかったし、アカデミックな雰囲気にな身を浸らせておきたかった。十分に就学期間を持った者の受ける社会的尊敬や、彼らが持つ余裕のようなものにも強烈な憧れを抱いていた。そして自分もその一群に入り込み、生きていくだけがやつの貧しい大衆とは一線を画した、認められた存在になりたかつたのだらう。むろん、彼の境遇から大学生になることは難しかったと思われるが、それでも彼が少しでも「工場の小僧」という身分からの脱出を切望し、「鉄道学校」を一つの足掛かりにしようとしたことは自然なりゆきと言えよう。久蔵も雄吉には一目置いており、信頼を寄せているので、反対されることはなく、雄吉の鉄道学校への「進学」は許された。

六〇〇人を超す応募者から約二〇倍の難関を潜り抜け、たった三人選ばれた中に入った雄吉は、鉄道業界では十分に将来を約束されたエリートと言えよう。当初はそのことを誇りに思え、「高等官」を夢み、人一倍勉強し、合宿生活も几帳面に過ごし、意欲を手にしたかにみえた雄吉だが、彼の夢は程なくして冷めていく。

3 分裂する心

「鉄道学校」は決して雄吉の望んだ「学校」ではなかった。そこは実際には「見習所」であり、彼の「教室」のほとんどは工場であ

り、教えを受けるのは教員ではなく「指導員」であり、彼がすべきことは講義を聞く、書物を読む、文章を書く、といった学問的作業ではなく、材料を削り、やすりをかけることであつた。簡単な作業ではないものの慣れるのにそう時間は要らず、その結果日々の業務への熱意は失われていき、次第に舎監や指導員への反抗心も芽生えていった。

そんな中で、雄吉が次に夢見たのは詩人であつた。

作業所では指導員に監視されながら表面の自分を取り繕わねばならない。指導員の監視には、戦時下の軍人のような張りつめた威圧感はない。それでも、彼らは「官営工場」の熟練者であり、この時期の「官営工場」は国策に沿つた軍需工場を意味しよう。したがって指導員には「官営の権柄な気風」も漂っている。しだいに雄吉は指導員に見せる姿と内面の自分との分裂を抱えるようになる。

作業への熱心な取り組みの成果として「手だけが、頭の神経とは全く別の神経に作用されるように動く」ようなこともできるようになつた一方、その間雄吉は「彼ひとりの心の製作をする」ようになり、そこに「若ものの毎日の歓喜と苦痛とを織りまぜた」という。面従腹背の姿勢を日常化させていくことは、雄吉の精神を疲弊させた。その心が「何か表現をとりたくな」り、詩人という生き方への志向となつて現れたというのは頷ける。が、具体的に彼が詩を創作する姿は描かれない。

雄吉が詩人を夢見る心には、自分の心を言葉で吐き出す方法を得たい、という願いもあるが、自身の苦悩と正対し、それを表現することを生業とするがゆえに何らの矛盾も抱えずに済む職業、という見方から憧れを抱いているとも言えないだらうか。メリヤス工場

の「小僧」から、選ばれて鉄道学校の中堅技工候補になったことは、一つの上昇と言えたはずだが、雄吉の心は一つの高みを知るとまた次の高みを求めるようになり、穏やかに鎮まることができない。

第三章には、鉄道学校の内部の様子が描かれる。そこに学ぶのは雄吉と同様高い倍率を潜り抜けて集まった若者たちだが、必ずしも鉄道技師を目指す者ばかりではない。雄吉のように、それまで身を置いていた環境からの脱出手段として鉄道学校に応募した者たちは、「鉄道」関係という業種の中でうまく夢を描くことができない。映画好きな平井はシナリオを書きたいと考えているし、いい家庭に育ったという西川は声楽の素質を持ち、歌うことの方が熱心であるし、子のない家庭の養子にされながらそのあとに実子が生まれてしまったという境遇の久保も、自らの生きる場を求めて技工見習に職を求めただけであった。

作品内時間の昭和六年から、それが読まれた一五年までの間に変わったことは、先に挙げた四大事業達成を前にした国内の高揚ムードと戦時色の強化であろう。「戦争の形勢が不利になる前は、帝国臣民にとって戦時を特徴づけるものは、暗さと明るさ、苦しさ¹⁰⁰と楽しさの共存だった」という指摘は『夢の彼方』発表時の世相をよくとらえている。昭和十二年七月に日中戦争が勃発して以来、大本営が設置され（同年一月）、国家総動員法も公布され（翌年四月）、パーマネットや白米が禁止され、結婚や出産が奨励され、農村の子供はウサギの飼育が義務付けられる（昭和十四年）等、枚挙にいとまがない。昭和十五年に入ってから、三月には芸名や商品名等の外国風の名前が改名を迫られ、四月には米・味噌など十品目の切符制導入が決定など、戦時色の強い規制が次々と掛けられていくのがわか

る。当時を生きた人々は、発展著しい社会に将来への希望を抱きつつ、他方では戦争がいつまでも終わらず、個人の生活への締めつけが徐々に強まるのを感じ取っていたはずだ。

春のある日、指導員が席を外した隙に、見習い生たちは一時間余りの「自由な天地」を味わった。雄吉は、はじめ「歓喜」を味わい、そんな自分に図々しさを覚えて「自分の良心の在り場をはっきりと知りたくな」り、次には「自分の良心の在り場を探らねばならぬ状態に落とされるというそのことを、情けなく思」い始める。さらには、そんな自分を口惜しく感じ、「少しでも汚い気持ちを自分の行動や意志の中に存在させては堪まるものか」という潔癖さに安心したりもする。

まだ大人になり切れていない少年たちが、監視の目を取り払われたときにサボることはむしろ健康な現象でしかないが、このような一コマにも、雄吉の心は一つの回路をぐるりと一周し、自分が墮落していないことを確認しないではいられない。

彼は外に出て、自分の職場である鉄道学校の敷地内を眺め渡す。広い芝生を囲んで「鍛冶職場」や「塗工職場」、「客車」などが配置され、雄吉が身を置く「見習作業場」も目に入る。雄吉には、これらの調った設備を自分のものとして喜ぶことができない。雄吉の作業場である「見習作業場」は、雄吉の目には「小さく」「暗く」見えるのだ。そして、「瞬間、雄吉は自分の境遇というものを、じんとやる瀬なく思ったが、そんなことを感じ得る余裕で、全く馬鹿げたことと、承知しながら、小説などによくあるように、何がしの子爵が自分の本当の父親であった、などという風にならないものか、などと、ふと想い起」こしたりもした。

このくだりについて、雄吉自身は「自分の自尊心が人よりも強いのだろうか」と自問している。学力も高く、賢い雄吉は、大人に近づくにつれ、経済的な格差が経済的なものだけでは済まない格差をも生み出していること、そして自分の出自は持たざる側にあり、しかもそのカテゴリーから出られる見込みがないことに悲しみを感じ始めているのだろう。

人々が自分の生きたい自由を求めて葛藤する、ましてや国策の花形産業である鉄道業界に就いた若者がそこに身を置く我が身を嘆くという姿は、昭和十五年の人々に許される描写ではあるまい。作品内時間を日中開戦前に設定したのはここに狙いがあったのではないか。

4 発病の予兆

雄吉は、三〇人中七番の優秀な成績で卒業し、月給の高い「一円二十銭組」として現場に出ていった。そこでも雄吉は、自己表現への欲求と、それをしないではいけない自分への嫌悪を繰り返し、神経を疲れさせる。それは、雄吉が自分の所属する階級をいやというほど自覚し、それゆえに誰よりも努力する自分をいとおしみ、そこに自尊心を築いてきたからこそ起こる葛藤でもある。

雄吉は久蔵ともお好とも、さほど関係は悪くなく、鉄道学校を終えてからは自宅に戻って暮らしている。たくさんいる弟妹にも愛情深い長男である。彼の悲しみの所在は、家族そのものではなく、臭いが染みつくほどの貧乏暮らしが、雄吉の望む生き方を阻んできたという思いだろう。幼いころ、新しいゴム長を買って貰った心の弾みから、水溜りを踏み散らした雄吉は、お好に平手で幾度も繰り返

し叩かれるという激しい折檻で戒められた。暮らしに余裕のないお好には、新しい持ち物にはしゃぐ子どもを可愛がる気持ちには持てなかったのだろう。が、人一倍感受性の強い雄吉には、貧しさゆえに理不尽な扱いを受けた記憶は消し難く、その後雄吉が抱き続ける悲しみの原風景を作ってしまった。

雄吉が使用中の便所の戸を、お好がうっかり開けてしまい、雄吉が泣き出したというエピソードは、すでに病の症状かとも思われる。が、雄吉にとつては、もつともデリケートに氣を遣つてほしいところに、まるで無頓着な家族に対する、怒りとも、言っても詮無い悲しみとも受け取ることができる。家族の中で、雄吉だけが、なぜこのように過敏で悩ましい日々を過ごさねばならないのか。

おそらく、雄吉だけが現在の暮らしから脱出したいと望み、それを努力によって実現させようと苦心しているからであろう。久蔵夫婦は現状に耐えるのが精いっぱい、改善に目を向ける余裕はない。幼い弟妹達が意志を持つにはまだ時間がかかる。年かさの妹に読書を勧めてもおよそ関心を示さない。そして、現在の雄吉は、高齢の両親と幼い弟妹達の実質的な経済的保護者という、逃れ難い立場をも負わされていた。

雄吉が適合できないのは家庭だけではない。自分が職工というカテゴリーに属していることにも彼は恥と悲しみを味わっている。

毎日彼は自転車を通った。退けどきの自転車の群に混つて街の中を走って行くとき、彼は、いつも暗い無表情な顔をしていた。喫茶店の門口などに女給が派手な着物のまま立っていて、自転車の群を見ていることがある。雄吉はますます怒ったような顔

で正面だけ見てペダルを踏んでいた。一時も早く、この自転車
の群から離れたい、と思う。この街にも大学生の帽子を被った
男も女連れで歩いていることがある。折目のついたズボンの足
をまっ直に伸ばして歩く男も多い。雄吉には彼らがみんなイン
テリに見える。雄吉の目から見ると、世の中には何とインテリ
の多いことだろう。

(第四章、傍線部引用者)

この箇所から察すれば、雄吉が望んでいるのは「インテリ」にな
ることと言えよう。工場労働者の一人として異性の目から眺められ
ることは、貧しさに身を浸す自分が蔑まれているような苦痛を、雄
吉に感じさせる。「大学生」には上昇志向に身を焦がすような切な
い努力は必要なく、彼らは学校で身につけた幅広い知識と学歴とで、
自然に堂々とふるまうことができる。この自由さこそが、雄吉が切
望して止まないものであろう。だからこそ、雄吉は、そこに近づく
ための努力をやめることができない。自分は貧しい一群に埋もれる
人間ではない、という自負心は、彼の努力を後押しするが、その努
力が決して彼を自身の望む「インテリ」にはしないことを悟るにつ
れ、雄吉は心を蝕まれていく。

5 花柳病に絶たれる「夢」

マッチを使って家でボヤを起こしたり、仕事場で寸法を間違えた
りといったいくつかの予兆の後、雄吉はついに仕事場で明らかな発
症を見せ、自宅に運び込まれる。病名は「遺伝性脳徴毒」であり、
一か月の入院の後、「気が狂ったと言っても、馬鹿になった程度」
で帰宅した。

「遺伝性」ということは、出生時に既に病気の因子が遺伝子に組
み込まれていることを指す。それでは、雄吉の苦悩は病の症状でし
がなく、いつか狂気を発症する予定が確定視される彼の努力は、し
ても甲斐のないものであったということだろうか。

少なくとも、雄吉の抱いた理想と現実のギャップへの苦悩は、病
のせいとはかりは言えまい。彼は、自らの所属階層を脱したくて
「鉄道学校」へ進んだ。鉄道に関心があつたわけではなく、閉塞し
た社会状況の中で、少しでも我が身を解放する道を模索してのこと
であつたと言えよう。

高い倍率を潜り抜けて「鉄道学校」に入つたことは、彼に自信と
誇りを手にさせたが、そのことは彼にいささかのエリート意識を持
たせ、見ないで済んできた「インテリ」の存在に気づかせてしまつ
た。雄吉は自身の手にした自信や誇りが大したものではないと思わ
ざるを得なくなり、さらなる閉塞感に追い込まれるに至つたのであ
ろう。

「夢の彼方」とは、のびやかに自分を生かしたい、何にも桎梏を
感じずに生きてみたい、という雄吉の「夢」の実現が、手の届かな
い遥か彼方にあることを意味するタイトルではないか。そして彼は
自身の力ではどうしようもないものの力によって、夢を絶たれてし
まつ。

最終シーンにおいて、工場街の託児所が描かれる。そこには元氣
な子供たちの姿があふれているが、「小児結核」が多く、またたい
がいの子が、「遺伝徴毒」に陽性反応を持っているという。雄吉の
「遺伝性脳徴毒」もこの「遺伝徴毒」の一種であろう。徴毒／梅毒
はいわゆる性病の代表的なものであり、性行為による感染以外に、

先天性のものは母体から胎盤内感染によって発病する。¹²⁾

当時性病は「花柳病」とも表現され、遊郭をはじめとする買売春の場で蔓延した。近代日本の公娼制度については藤目ゆきの『性の歴史学』¹³⁾に詳しい。感染の広まりに際しては、娼妓の側に感染源があるとして彼女たちに厳しい取り締まりや検査が行われた。公娼・私娼と関係を持った男性が性病に感染し、さらに妻に感染させるというケースは後を絶たなかったが、男性に対する検査の義務付けやましてや既婚男性の婚外交渉を取り締まる法は成立しえなかった。母体からさらに胎児へ、という感染についてはあまり知られていなかった節もある。

「女には純潔を男には性的自由を容認する性倫理の二重基準のもとで夫に性病を感染させられる女性の怒り」¹⁴⁾を受け、日本キリスト教婦人矯風会や新婦人協会、その後は婦人参政権獲得期成同盟会へと女性活動家が行った運動には、娼妓本人の救済に目を向けない社会浄化運動的な傾向や優生思想の影響などの問題点も指摘されているが、「花柳病男子の結婚制限に関する請願書」提出（大正九年）など、ともかくも男性の側に責任の所在をみて改善を要求したのは女性による運動のみであった。

このように、近代の日本は、男性の婚外交渉に許可を与え、性の買い手である大量の男性客には何らの制限もかけなかったのであるから、性病対策をどれほど真剣に考えていたのか疑わしい。それだけでなく日中開戦後には、国民に「子宝報国」を強要し、早婚・多産こそ女性の務めとして奨励した。が、その結果、たとえば先の工場街にも子供があふれているものの、そのほとんどが遺伝性の性病によって雄吉と同様の将来を危ぶまれる結果をもたらしている。女

性を軽視した政策のつけは、戦況の深まりに合わせ負の結果を如実に現していく。明治以降、軍駐屯地には必ず慰安所が設けられ、兵士のために日本の買春業は保護され、性病感染が拡大していったといえよう。いわば、雄吉は戦争を優先する国の方針に息の根を止められたとも言えるのである。

「背広を着た参観人」は役人でもあろうか、「じつと子供のひとりを見た」。外見上元氣な子供が沢山育っているように見えながら、その実彼らの将来に発病が運命づけられていることは、昭和一五年当時の日本の浮薄さを暗示しているようでもある。どんなに懸命に生きて、どこかの時点で夢を絶たれてしまう。それは、戦時下においては、病気の因子を持つか否かに関わらず、すべての人々にとって共通の恐怖感であったのではないか。人が狂う前に、すでに社会は狂気を孕んでいた。多くの人々は、狂気に身を沿わせて時代をやり過ごし、後に大きな後悔を味わうことになるが、敏感かつ純粹な雄吉には、病がなくても自身の身が保ちきれなかったことだろう。雄吉は、戦争に向かいゆく世相の中で、自分の求める生き方を模索しながら、国の偏った施策の犠牲となって夢を奪われていく。彼の姿は、戦時下の日本人すべての身に起こり得る不幸を予言していたとも言えないだろうか。

6 おわりに

ラストシーンに唐突に置かれた託児所の場面は、性病対策の手落ちの影響が、遊郭などとおよそ無縁と思われる幼い男の子に現れるという衝撃的な現実を伝えている。女性の心身を軽視した政策が、一人でも多く兵士を要する戦時下においてしつぱ返しを食うという

展開は示唆に富む。雄吉の発症以来、久蔵は急に老け込み、お好も泣いたような目で過している。それは期待をかけた雄吉が発病したせいばかりではない。「工場街」と雄吉の家は近い。雄吉の下に次々と生まれた弟妹達にも、同じ病の危険は濃厚だろう。悲劇の連鎖は次々と広がる。

昭和六年あるいは一五年という時間、そして遺伝性の性病というトピックに注目して『夢の彼方』を読み解いてみた。この作品は、国内四大事業に沸き立つ昭和一五年の日本国民に対し、その裏で進行する戦争への危機感・警戒心を喚起させるものであったといつてよからう。昭和六年という作品内時間の設定は、佐多の発言のための目隠し装置であったと思われる。しかし、おそろくすでに時は遅く、このあと国内の状況は刻一刻と戦時色を強めてゆき、人々は雄吉のようにある日突然人生を途絶させられていく。『夢の彼方』は、昭和一五年の佐多に「反戦を作品に盛り込む苦心」があったことを十分に物語る作品であったと言えるよう。

注(1) 新潮社、昭和四〇年三月。

(2) たとえば『佐多稲子全集 第十八巻』（講談社、昭和五四年六月）巻末の「年譜」には昭和一五年の項に「この頃より次第に、戦時体制への抵抗の意志も薄れる」と書かれている。

(3) 『分身』（『文藝春秋』昭和一四年七月）、『氣組』（発表誌未詳）、『矜持』（『新潮』昭和一五年一月）、『小間使いの誇り』（『日本農業新聞』昭和一五年一月一日）、『姉と妹』（『陣中倶楽部』昭和一五年一月）等。

(4) 『日本近代女性文学論 闇を拓く』（世界思想社、平成一〇年二月）。

(5) ジョセフ・フォン・スタンバーグ監督、昭和五年製作・公開。日本で

は昭和六年二月二五日より松竹系で公開が開始された。初の日本語字幕付トーキー映画。

(6) 昭和一九年に「戦ふ少年兵」シリーズとして丹羽文雄らとともに九編の小説が連続して『満州新聞』に連載を予定されていたが、そのうちの第六編目として三月四日から二六日まで連載された作品。西田勝の翻刻によって平成二四年一二月に公開された。

(7) 鉄道事業の歴史に関しては『鉄道歴史読本』（朝日新聞社、平成二一年三月）・指南役『幻の一九四〇年計画 太平洋戦争の前夜、奇跡の年が誕生した』（アスペクト、平成二一年四月）、『時空旅人 vol.19 日本を支えた鉄道の歴史』（三栄書房、平成二六年四月）等を参照した。

(8) 『幻の一九四〇年計画 太平洋戦争の前夜、奇跡の年が誕生した』（7に同じ）より。

(9) ケネル・ルオフ著／木村剛久訳『紀元二千六百年 消費と観光のナシヨナリズム』（朝日新聞社出版、平成二二年一二月）より。

(10) (9)に同じ。

(11) ほは同じエピソードが佐多稲子『若き妻たち』（『婦人公論』昭和一七年九月〜一二月）にも使用されている。

(12) 『最新 医学大辞典 第3版』（医歯薬出版、平成一七年四月）等を参照した。

(13) 藤田ゆき『性の歴史学 公娼制度・堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』（不二出版、平成一七年一二月）。

(14) (13)に同じ。

※ 本文よりの引用は、佐多稲子全集第三巻（講談社、昭和五三年二月）による。